



テクノロジーと法の未来へ

FACULTY OF GLOBAL INFORMATICS

国際社会が抱える問題を「情報の仕組み」と「情報の法学」の視点で分析・解明し、解決策を論理的に構築する、iTL独自の学びに迫ります。



国際情報学部国際情報学科4年
東京都立白鷺高等学校出身

専門性の、その先へ

おかもと かずま
岡本 和真

みではなく、どのフィールドでも通用する能力を養えることが重要な特長だと考えています。未知の分野にも臆することなく探究していくことで、みずからの可能性を大きく広げることができると信じています。

国際情報学部(iTL)での学び

iTLでは情報学や法学の授業はもちろん、グローバル教養として「哲学」「国際関係論」「経済学」「社会学」など非常に幅広い内容の授業が用意されています。多様な学問を複合的に学ぶことによって、社会がどのように成り立っているのかを初めて理解することが出来ます。これらの学びを通して自身、以前よりも俯瞰的に、そしてフラットに世界を見渡すことができるようになったと感じています。

ただスキルを習得するのではなく、多角的な視点から世界を捉える力を養うことは、情報化が進み、目まぐるしく

く変化する現代社会に不可欠なものではないでしょうか。また、この力はみずからが進みたい道を見つけ、未来を切り拓いていくための原動力になると確信しています。

研究

3年生の夏にはゼミメンバーとグループを組み、社会情報学会において「人工知能に対する不信」をテーマに定量分析を用いた研究発表を行いました。会場では出席者の方々からお声掛けいただき、社会における人工知能への関心の高さを肌で感じました。

この研究で見えてきたのは、将来的に人工知能の精度が向上し続けても、不信が残り続けてしまう可能性があるという事です。今後、生活の中の多くの場面で人工知能は当たり前前に利用されるようになると想定できますが、不信による抵抗感が広がれば社会に資するサービスでも普及が遅れてしまう事態が考えられます。そのような課題



研究発表を行った社会情報学会の会場

意識から、卒業研究では人工知能の信頼性に関わる重要な論点の一つである「説明可能性」をテーマに据えています。高度なモデルほどその内部は複雑で、人間にとつてのブラックボックスとなってしまう、振る舞いの理由や出力の根拠がわからなくなってしまう。人工知能がどのようにしてその答えや振る舞いを導き出したのかを説明できる能力、つまり「説明可能性」の向上は、このような問題を解消するための鍵となります。生物が環境に適応していく過程を模倣したアルゴリズムをこの考えと組み合わせ、より人間に理解されやすいように「進化」していけないだろうかというアプローチで研究を行っています。iTL独自の奨学金で

はつめこ

私は2年生の後期から須藤修先生のゼミに所属しています。4年生になった今、改めて「国際情報学部の強みとは何だろう」と考えることがあります。それは、複雑化する社会全体を多角的に見渡し、将来どのような道に進んでも自分自身の活動を支えてくれる「土台」を築くことにあるのではないのでしょうか。すなわち特定の専門分野の



右：行動経済学を学ぶために参考にした1冊
左：最新のAI動向がまとめられている「AI Index Report 2025」

ある「iTL先端的プロジェクト奨学金」に採択いただいたことが、この研究の大きな後押しとなっています。

卒業後の進路

卒業後は、学部での学びをさらに深めるため、大学院への進学を予定しています。大学院の筆記試験の準備は、iTLでの学びの集大成ともいえる経験でした。試験では情報科学の専門知識はもちろん、法学の授業内容であった情報技術のガバナンスまで、非常に幅広い知識が問われました。授業のノートを見返していく中で、これまで「点」として学んできた知識が、実は各トピックについて勉強するために不可欠な基礎知識の多くを含んでいたことに気が付きました。この4年間で履修したカリキュラムによって、大学院での専門領域に踏み込むための「スタート地点」に立てたと感じています。

また、多くの学生一人ひとりにとって、それぞれの興味や目標に応じた道へと進むための良いバックグラウンドになると信じています。

須藤先生は「思考の『道具』を獲得することが重要だ」とおっしゃっていました。それは多様な正しい視点から物事を見つめていくために哲学や経済学などを学ぶことだと理解しています。視座を高め、社会との関わりについてさまざまな側面をより客観的に考えてこそ、物事の本質を見抜くことができ、その、物事の本質を見抜くことができるのではないのでしょうか。ゼミでは、スタンフォード大学の発行している「AI Index Report」から最新の人工知能に関するデータを参照することに加えて、行動経済学のアプローチから考えていくことも学びました。研究テーマである人工知能についても、仕組みや技術だけに向き合うのではなく、社会においてどのような価値を生み出し、どのような社会を築けるかということ

を追求していきたいと考えています。

終わりに

昨年の3月には課外活動として、中央大学ボランティアセンター主催の能登地方での活動に参加させていただきました。大学生のうちに多様な経験をすることには非常に大きな意味があり、

自分の世界を広げることができると実感しました。

iTLでの4年間は、私にとってさまざまな方向に自分自身の可能性を広げることのできた時間でした。ほかの学生の皆さんも、このような環境でみずからの興味を探求し、道を拓いていけることを心から願っています。

